



リア等ドイツ語圏の国の植木屋を片端から訪ねた。

植木生産者はドイツ語では“Baumschule” バウムシュレと云う。当初、バウムは樹木だし、シュレは英語のスクールなので、植木屋の看板を見る度に、こちらはなんと園芸（植木）学校が多いんだろう、と思ったものだ。ところが、シュレは「育てる」と云う意味があり、苗木生産者であることがやがて判った。ドイツ語の方は、ワングルの一年後輩だった女性に「いつか一緒に、スイスのmatterホルンに登ろう」なんて、夢のような約束をして結婚したのだが、それを果たすため、二人で会話教室に通い、片言の会話が出る迄にはなっていた。結果首尾良く結婚に漕ぎ着け、matterホルンにも登る事が出来たのだが、これもまた、別の話になる。

私のプラン-即ち「ヨーロッパでの盆栽の普及・啓発を志していて、そのための拠点として、貴方の所を使わせて貰えないだろうか？」との質問を大小の植木屋を訪ねて、直接聞いて回ったのである。当時はパソコンがあるわけではなく、所謂草の根作戦的に1軒々々尋ね、情報を得るしかなかった。

ドイツ北部、ブレーメンからハンブルグ一帯にもバウムシュレ・植木屋生産者を多く見かけた。メキシコ湾流の影響で、冬季の気温が比較的高く、土壌に至る所にピートの層があり、肥沃で、植木作りに適しているように思えた。その内、何軒かは見事なトピアリーを仕立てているところがあった。その他イタリア北部のドイツ語圏、スイスのドイツ語圏、デンマーク、スロバキア（当時は分裂前でチェコスロバキアが国名だった）、ハンガリー、分裂前のユーゴスラヴィア等、それぞれの国の国境近くのドイツ語が通じる地域を片端から回った事になる。結局8カ国、凡そ60軒以上を訪ねることになったが、幸いなことに、概ねどこの植木屋、生産者も極めて好意的で、「是非ここでやらないか」的な返事をたくさん貰うことができた。だが、植木屋巡りだけで3ヶ月以上かけてしまった事になる。

最終的には、あらゆる条件をかなり理想的に整えてくれた、オーストリアのほぼ中央のザルツブルグのバウムシュレ・マーヤー（Baumschule Mayer）と云う所で、働きながら、盆栽の試作をする事に決めた。山が好きだった私にはオーストリアンアルプスの縁に位置し、近くに素晴らしい山々が連なっている事も、ここを選んだ大きな理由の一つにはなったのだが。

アウトバーンでドイツから来てオーストリアに入るとそこは既にザルツブルグで、直ぐに南アウトバーン



バウムシュレ・マーヤー（Baumschule Mayer）のカタログより

とウィーン方面へ行く西アウトバーンに分かれる三叉路になっている。西アウトバーンを少し走るとその先が中央インターチェンジで、バウムシュレ・マーヤーはそのすぐ際にある。例によって紹介も何もなく、いきなりの押しかけだったが、マーヤーさんも、他の農園主と同じく、はるばる日本からやって来た得体の知れない初対面の日本人を快く迎えてくれた。そして二つ返事で「貴方はここで、プランを実行することが可能です。問題はありません。BONSAIにはとても興味があります」などと言って、大きな手で握手をしてくれたのである。

後に判ったのだが、当時オーストリアは分裂前のユーゴスラヴィアと季節労働者受入の提携があり、毎夏4～5名の働き手を雇っていた。私を簡単に受け入れてくれたのは、そんな事情もあったのである。彼らは畑の隅の古いキャンピングカー3台で生活していた。1組の夫婦もいた。

スタッフは主人のマーヤー氏でシェフと呼ばれ、オランダ出身でエリザベートという名の美人の奥さんはシェフィン（女主人）と呼ばれていた。従業員は番頭役のヘルムートと云う地元の若者、パートの主婦3人と、そのユーゴスラヴィア人5人の11人で、皆勤勉だった。ザルツブルグ州では最大の生産者であった。

## ザルツブルグに暮らす

準備のため一旦帰国し、8ヶ月後の3月末に家族3

人での生活を始める事になるのだが、ここで過ごした丸3年の生活は文字通り夢の様な素晴らしい体験であった。妻は2歳になる長男の事がとにかく心配で、言葉を覚え始める時期に環境が変わる影響を案じていたが、世話になる家に午過ぎに着いて、その日の夕方には大家の殆ど同年輩の子供達2人と芝生で駆けまわって遊んでいた。我々が住むことになった所はザルツブルグ西側郊外の住宅地の広い庭のある大きな比較的新しい家で、2階の40㎡の居間（3ベッド）と客用の20㎡の2部屋と、20㎡位のDKとバス・トイレが付いていた。ただバスとトイレが一緒なので、最初は戸惑ったが直ぐに慣れた。有難いことに寝具カバー、シーツ類は洗い替え用も含めて全て揃っていたし、タオル類もホテル並みに何セットか用意されていた。キッチンには大きなオーブンがあって妻を喜ばせたとし、食器、炊事道具も完璧に揃っていて客を招ぶこともできた。居間にはテレビこそなかったが、その頃としては、ちゃんとしたオーディオ装置も用意されていた。家賃は月約3万円位だった。家の近くにはザルツァッハゼーと云う小さな湖があって、春の岸辺では、数種の水鳥と一緒に白鳥も営巣していた。湖の向こう側にはウンターズベルグという山が聳えていた。標高は2,000mに満たないが、すこぶる格好の良い山で、冬に雪が着くと、スイスのアイガーを思わせる様な迫力があつた。

街へは20分間隔のバスの利用で、30分程でザルツブルグの新、旧市街に出られた。車はやはり必需品で、新聞のプライベート広告欄に多くの提供があり、古いVWケーファー（カブトムシ）を20万円程で購入した。優秀な車で、3年間、殆ど故障なしで走ってくれた。免許証は住民登録をすませれば、試験なしで日本と同等の免許証を発行してくれた。通勤は徒歩で20分弱だったが、車を使う事もあつた。翌年から長男はバウムシューレのそばの幼稚園（キンダーガルテン）に通うことになったのだが、歩いての通園になった。

さて、こうしてザルツブルグでの生活が始まった。バウムシューレでの主な作業は、苗の掘り取り、根巻、4トン車への積み込みと配送で、シェフとユーゴー人が携わつた。その次は挿し木と発根した苗の植え付けで、これも春～秋は、殆ど連日のものだったが、挿し木はユーゴー人以外の6人で続けられた。挿し床は日本でもお馴染みの浅いプラスチックのコンテナで、ミスト装置の完備した300㎡程の温室に整然と並べられた。苗の掘り取り、積み込み等の作業、挿し穂の収集、それに除草はユーゴー人からの人達が専ら携わつた。布

を使つての根巻作業は全員で片付けた。土はやや重い粘土質で根はしっかり張り、日本（関東）のロームのように崩れ落ちる事はなかった。5～7月は午前中はそんな荷造り、午後は挿し木という日が多かつた。

始まって3日目に、「お前は日本人で専門学校を出ているんだからトラクターの操縦は上手い筈だ。今日は畑の準備をしてくれ」と言われた。松戸では教えて貰えなかつた。赤面してトラクターは出来ないと言つたらビックリされて「当てにしていたんだが仕方がない、今日は1日やるから練習しろ」と英国製のマッセイファーガソンという巨大な多目的トラクターを押し付けられた。後部に各種のアタッチメントを繋ぐと耕耘は勿論、畝立、中耕、種蒔、植え付け等、何でも出来た。操縦自体はそれほど難しくなくすぐ慣れたが、端や縁の処理と、100m以上の畝を真っ直ぐに立てたり、植え付けを直線状に通すのは至難の技だった。その日は耕耘と畝立てを一日練習させられた。数ヶ月後には何箇所か実際にやらされたが、シェフのそれとは全く違って、植えつけられた苗木の線はグニャグニャの仕上がりで、そこを通る度に皆に冷やかされた。植えつけられた苗は最低2年はそのまま育てられるのだ。

松戸で教えて貰えなかつた作業にバラの接ぎ木がある。翌年春早くに、バラの接ぎ木（芽接ぎ）作業があつた。いわゆるT字型剥皮の芽接ぎだったが、実際にやったのは初めてだったが、難しい事もなくすぐ慣れた。これも6人の仕事だった。60ほどの品種をそれぞれ50～100本ずつ接ぐので5,000本以上になるが、数日間かかつた。私の様にしゃがむと云う姿勢のとれない彼らは膝をついたり、名画「ミレーの落穂ひろい」に見るように腰を折つての作業で苦しうだった。はじめは手間取つたが2～3時間もすると、誰よりも早く出来る様になった。

夏のヨーロッパは日が長い。5時に勤務が終わつてから数時間は明るいので、ほぼ1日分、別の仕事が出来た。そんな時間を使つて、盆栽作りも始めた。鉢はあらかじめ日本から送つておいた。当初は温室内のベッド隅に試作品を並べ始めたのだが、数ヶ月後には100鉢近くになってしまった。

困つた事に、客が見付けて煩わしい事になってきた。非売品の大きな看板を設けたのだが、対応しきれなくなつてきた。やむなくめばしいいくつかの鉢は住居の方に棚を作って置くことにした。残りは人目につかないような目隠しを作らねばならなかつた。

3年後には何度か市内で展示会も開き、作品をそつ



盆栽売り場



チェコの造園屋の日本庭園コーナー



スイス盆栽展示場



日本庭園用の売り場

くり買い取ってくれたウイーンの人に助けられ、ウイーンに移る事になる。そして国営の公園内に日本の盆栽家から寄贈してもらった50点程の盆栽を展示して、ヨーロッパでは初めての、公営の盆栽展示場が出来るのだが、その顛末は「花葉・17号」に詳しい。

### 盆栽輸出の現在

帰国後十数年は、盆栽とその付属品（鉢や手入れ道具等）、及び赤玉土等の輸出をしてきた。イギリスも含めヨーロッパ西側諸国は「土の輸入」というものに日本、アメリカ、オーストリア、ニュージーランド等の国に比ベタブー感がない。国境が陸続きで、土付きの農産物の流通をしてきた長い歴史がある。輸出を始めた当初、日本の植物防疫所は相手国の土に対する輸入の許可証が必須であると言ってきた。送られてきた許可証には、申請された「土付き」の植物に対する輸入は「許可されている」となっていた。当初は許可証とはそういった物なのだと疑いもせず、植物防疫所（本庁は横浜で東京は支所）も十数年の長きに渡り、許可証の取得を要求してきた。その後、植物の輸入検査は、それ

まで輸入国が自主的に行っていたのだが、EU主導に変わってきた。条件も年々厳しくなっている。スイスはEUに加盟していないので、最近迄は自国の基準で対応していたが、EUから強い要請が出され、現在ではEUと全く同じ検査基準を採用している。ただ「土」に対する許可証はようやく必要なくなったが。

最近の輸出は盆栽よりも、型を整え、刈込を施した庭木の方に人気に移り、8～9割が庭木になってしまった。庭全てを日本庭園にするのではなく、芝生の隅や玄関のファザードに石組した池と石灯籠、日本風な植木を数本あしらうと、日本庭園コーナーのような物ができる。これが静かなブームで、庭木の需要は増すばかりだ。樹種としては、ゴヨウマツ、キンメツゲ、キャラボク（イチイ）、サツキ、ドウダンツツジ、カエデ、モミジ等が主なものである。ところが土付きのままの庭木の輸出は、ネマトーダの侵入を警戒する植物防疫所の厳しい規制で年々難しくなっていて、いつストップするか判らない。薬害の少ない土壤中の対ネマトーダ殺虫剤の出現が待たれている現在である（未完）。